

# チャパ・チューキセンゲのゴク翻訳官批判

——認識手段性の確定をめぐる——

西 沢 史 仁

## 0. 序文

チャパ・チューキセンゲ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109–1169) は、後伝期の学問寺として著名なサンブ寺に於いて十二世紀に活躍したカダム派の学僧である。チャパの論理学の主著『論理学意闇払拭』 (*Tshad ma yid kyi mun sel*, 以下、『意闇払拭』, カダム全集第八卷 pp. 434–626 /1-96a4) は、後代の文献にも、「チャパの要綱 (cha/phyabsdus)」として言及され、大きな影響力を持った作品である<sup>1)</sup>。筆者は、西沢 2010 に於いて、チャパは、認識手段の定義の議論に関して、ゴク翻訳官ロデンシェーラブ (rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059–1109) の見解を批判し、それをアンチテーゼとして、ゴク翻訳官とは全く異なる認識手段の定義を立てたことを指摘した。さらに注目すべきは、チャパがゴク翻訳官を名指しで批判している箇所が『意闇払拭』に見出されることである。例えば、『意闇払拭』第三章直接知覚章では、直接知覚の定義に関して二つの前主張、即ち、ヴィニータデーヴァ (‘Dul lha, Vinitadeva) の説とロデンサンポ (Blo ldan bzang po) の説を立てて批判している (ロデンサンポ批判は、『意闇払拭』 41b7–42a1)。この「ロデンサンポ」は、ゴク翻訳官ロデンシェーラブの異名に他ならない<sup>2)</sup>。筆者の解釈では、このゴク翻訳官こそがチャパにとって最大の論敵であり、『意闇払拭』にはそれ以外にも多くの箇所 でチャパはゴク翻訳官の解釈を批判している。本稿に於いては、その一例として、認識手段性 (prāmāṇya) の確定、所謂、自確定 (rang nges) と他確定 (gzhan nges) の議論を、特にその定義に焦点を絞って紹介したい。

## 1. 当該の科段

『意闇払拭』に於いて、チャパの認識手段論の中核部分は、「個別的に認識手段の定義を確立すること」(『意闇払拭』 32a2–40a3) という科段に見出されるが、それは、1. 「自身が認める定義を確認すること」、2. 「その過失を断滅すること」、

3. 「定義を確定する認識手段」という三つの科段に分けられる（西沢 2010, p. 65）。このうちの第三の科段に於いて、或る知が認識手段であることを確定する認識手段が論じられるが、これが認識手段性の確定の議論に相当する<sup>3)</sup>。これはさらに、1. 「自確定と他確定の定義」（『意闡払拭』35a3-35b5）、2. 「分類」（『意闡払拭』35b5-36a2）、3. 「個別的設定」（『意闡払拭』36a2-40a3）の三つに科段分けされており、本稿で扱うのはそのうちの第一の科段である。

## 2. 『意闡払拭』に立てられた前主張 —ゴク翻訳官の見解—

まず最初に、チャパは自確定と他確定の定義に関して、以下の説を前主張に挙げている。即ち、『意闡払拭』35a3-5：

或る者は、「認識手段の意味 (tshad ma'i don) は、自から確定されるもののみである。即ち、認識対象を理解しないならば、認識手段ではないが、認識対象を理解するとき、その限定者 (khyad par,\*viśeṣaṇa) として、その知が [認識対象を] 認識するもの (jal byed) として確定されないこともまた対立である。[例えば、] 杖を有するもの (dbyig pa can,\*dañḍin) として確定される時、杖 (dbyig pa,\*dañḍa) が確定されないことは対立であるようなものである。それ故、実際には (don la), 自確定と他確定と分けられることはないので、論書に於いて、自確定と他確定の二つに分けられているのは、認識手段の言説 (tshad ma'i tha snyad) に依拠して分けられたのである。認識手段の言説が [その知] 自身により確定されるならば、自確定であり、他 [の知] に依拠して確定されるべきものは、他確定である」と云う。

この前主張者によれば、全ての認識手段は、認識手段の意味 (don, \*artha) を自身から確定することが出来るので、自確定である。しかし、論書に於いて自確定と他確定が区別されているのは、認識手段の言説 (tha snyad, \*vyavahāra) に依拠して分けられたと解釈する。

この前主張は、ゴク翻訳官の『量決択難語釈』<sup>4)</sup>に見出される見解を踏まえたものと推定される。『量決択難語釈』49.3-13：

[認識手段性を確定する知により認識手段と] 確定されることの意味は何であるのか、と云うならば、これ (= 認識手段性を確定する知) により [[「認識手段」と] 言説化すること (tha snyad du byed pa) という意味である。これ (= 認識手段性を確定する知) は、先行する [知] により [認識手段の] 意味 (don) が成立したのもののみに対して、[認識手段の] 言説 (tha snyad) を成立させる認識手段である。勝義として、認識手段性は全て自身により確定される。なぜならば、全ての認識手段は、所知に対して認識手段であり、所知が [知により] 理解されることもまた、[その対象を理解する] 知を理解することに依拠するからであり、というのも、杖を理解せずに、杖を有するものを理解する

## (78) チャパ・チューキセンゲのゴク翻訳官批判 (西 沢)

ことはないように、能取を理解せずに、所取を理解することもまたないからである。それ故、認識対象を確立すること (= 認識対象を理解すること) により、[その認識対象を理解する知] 自身が認識手段であることまた、意味的に (don [gyis]) 理解されるが、認識対象を<真実のもの>と言説化することにより、[それを認識する知を] <認識手段>と言説化するだけである。そうであれば、<他 [の知] から認識手段と確定されることの意味>もまた、他 [の知] により「認識手段」と言説化されることという意味である。

ここでゴク翻訳官は、認識手段の意味 (don) の確定に関しては、勝義として全ての認識手段は自確定であるが、認識手段の言説 (tha snyad) に関して、他確定が設定されることを明記している。

それに対して、チャパは、その直後 (『意闡払拭』35a5-35b1) に、三つの論難を立てて批判している。紙面の制約上、ここではその全てを紹介することはできないが、一点のみ紹介するならば、例えば、推論を認識手段と認めないローカーヤタ派の心相續にある推論の如きは、推論である以上、自確定であるが、それは「認識手段」と言説化することは出来ない。なぜならば、ローカーヤタ派はそれを認識手段と認めないから。それ故、その知を「認識手段」と言説化することがその知自身により確定されるものを、自確定の認識手段として立てることは出来きず、推論が他確定となる過失がある、と云う。

### 3. 自確定・他確定の定義に関するチャパの解釈

他方、チャパ自身は、『意闡払拭』35b1-5 に於いて自確定と他確定の定義の自説を述べている。その内容を簡単に紹介するならば、まずチャパは、或る知が認識手段であることを確定するという場合に、それは、認識手段の (1) 定義基体 (mtshan gzhi) と (2) 定義対象 (mtshon bya) と (3) 定義 (mtshan nyid) の三つのうち、何れであると確定することを意味するのかと選択肢を立てた上で、結論として、その知が認識手段の定義を充足することがその知自身によって確定されるか否かにより、自確定と他確定の区別を立てる。ゴク翻訳官は、認識手段の言説、即ち、定義対象の側から自確定と他確定の区別を立てたので、この点で両者の間に解釈の相異が認められる。チャパは、認識手段を、<断定された実対象に対して逸脱しない知の形象により、実相と対立した増益を生じさせる能力を斥けるもの (yongs su bcad pa'i don la mi 'khrul pa'i blo'i nam pas gnas lugs dang 'gal ba'i sgro 'dogs skyed pa'i nus pa bzlog pa)<sup>5)</sup>>と定義するが、その定義の二支分のなかでも、<実相と対立した増益を生じさせる能力を斥けるもの> (= 自体の特性) の部分は、全ての知自身の

「直観 (myong ba, i.e., rang rig)」により確定されるので、特に、〈実対象に対して逸脱しないこと〉 (= 把握方法の特性) が、その知自身により確定されるか否かにより、自確定と他確定の区別を立てた (『意闡払拭』 35b4-5)。

#### 4. 結語

以上のように、チャパは自確定と他確定の定義に関してゴク翻訳官の解釈を前主張として立て批判したことが確認された<sup>6)</sup>。同様に、それらの分類に関しても、チャパはゴク翻訳官とは異なる解釈を取っている。特に、第三の科段「[自確定と他確定の] 個別的設定」(『意闡払拭』 36a3-40a3) に於いては、チャパは、その科段全体にわたり他の者達の説を祖述しているが、それはその内容から判断して、ゴク翻訳官ないしその系統の説に相当する可能性が高い。注意すべきは、チャパはその全体を批判対象として引いているのではなく、自説として受け入れられるものは受け入れ、受け入れ難いもののみを批判していることである。このことは、チャパが、ゴク翻訳官の解釈を踏まえつつ、それを批判的に検証することを通じて、自身の解釈を形成したことを示している点で注目に値する。その詳細については別稿にて論じたい。

- 1) この『意闡払拭』のテキスト情報と先行研究については、西沢史仁、「チャパ・チューキセンゲの認識手段論—認識手段の定義をめぐって—」『日本西藏学会々報』56 (2010) [= 西沢 2010], pp. 61-65, 及び、同論文に挙げた参考文献を参照されたい。
- 2) dPal dpa' bo gtsug lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. Vol. 1 (stod cha). Varanasi: Vajra Vidya Library, 2003, p. 725.2-5 参照。
- 3) この部分は、チャパの『量決訳註』(カダム全集第八巻 pp. 35-427/1-197a3) 20b3-35a9 と、科段及びその内容に密接な対応関係が見られる。『意闡払拭』の当該部分全体の科段、及びチャパの『量決訳註』との対応箇所は学会発表資料に記載した。
- 4) rNgog Blo ldan shes rab, *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*. 1st ed. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1994.
- 5) 『意闡払拭』33a4-6 参照。チャパの認識手段の定義については、西沢 2010 pp. 65-70 を参照。
- 6) このチャパのゴク翻訳官批判は、ロンチェン・ラブジャムパ (Klong chen rab 'byams pa) に帰される論理学綱要書 *Tshad ma de kho na nyid bsdu pa bzhuqs*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2000, pp. 123.19-127.5 に紹介されている。そこには合わせて、チャパとギャマルワ (rGya dmar ba) —ゴク翻訳官の四大弟子の一人であるキュン・リンチェンタクの直弟子にして、チャパの主要な師の一人—との論争も引かれている。

〈キーワード〉 チャパ, ゴク翻訳官, 認識手段性の確定, rang nges/gzhan nges  
(東京大学大学院)